

＝学生論壇＝

『ハムレット』を私が演出するとすれば

<教師評>

今年の英米演劇演習3のクラスは『ハムレット』を取り上げた。テキストは大修館シェイクスピア双書を使い、ブラナーのフル・テキスト版の映画を基調にビデオを適宜見せた。あらかじめ、取り上げる場面を決め、そこを読み合わせ、レポートに基づいて、あるいは、私から問題提起して、ディスカッションした。ここで紹介するのは、学年末のレポートである。7題の課題について好きなものを選び、書くことにしていたが、ここでは、(7)の「『ハムレット』をあなたが演出するとしたら、どのような視点を強調し、どのように演出したいですか。」を選択したなかから学部4年生、3人のレポートを紹介する。

(高杉玲子)

(1) 冷と暖、明と暗の対比に注目

寺 坂 圭 介

まず私が『ハムレット』と言う作品の演出家だったら、授業中に見たブラナーのビデオの『ハムレット』よりももっと暗く、重苦しい作品にしたいと思う。あのビデオの『ハムレット』は色々な場面で、良い意味でも悪い意味でも、私の期待を裏切ってくれたと思う。

まずは、全体的に出演者がみな美形だったことに驚いた。ハムレット

やオフィーリア達の主役陣が美形なのは頷けるが、クローディアスやレイアーティーズ、ホレイショーまでもが美形だったのにはとても驚かされた。現代の演出家が作り上げた“現代のハムレット”だから、配役があのような美形だらけでも納得できる。けれども私がこの作品を見た感想は、あまりにも出演者が美形すぎて、全体的にかえって作品が爽やかになってしまっていると感じた。例えばクローディアスは、私があこのビデオを見る前に作品を読んだ中でのイメージでは、もっと陰湿そうでもっと腹黒そうな感じをうけていた。他の作品から例を出すならば、私のイメージするクローディアスは、『ヴェニスの商人』の中に登場するシャイロックの様な雰囲気を持っていた。ところが、ビデオの中のクローディアスはまるで正義の主人公の様な清閑な顔だちをしているため、私のイメージとは異なり、何か味気のないものに感じられてしまう。ハムレットが“*It is not very strange; for my uncle is King of / Denmark, and those that would make mows at him while / my father lived give twenty, forty, fifty, a hundred ducats / apiece for his picture in little.*’Sblood, there is something / in this more than natural, if philosophy could find it out.” (2. 2. 358-62) と忌み嫌われるほどの人物を表現するためには、私はもっとアクの強い強面の人をクローディアスに配役したい。また、“*O, ‘tis too true! / How smart a lash that speech doth give my conscience! / The harlot’s cheek, beautied with plast’ring art, / Is not more ugly to the thing that helps it / Than is my deed to my most painted word. / O heavy burden!*” (3. 1. 49-54) の様なクローディアスの、自己の良心を呵責するシーンはあまり強調せず、“*It shall be so: / Madness in great ones must not unwatch’d go.*” (3. 1. 187-8)、や“*I like him not; nor stands it safe with us / To let his madness range.*” (3. 3. 1-2)、“*Arm you, I pray you, to this speedy voyage; / For we will fetters put about this fear, / Which now goes too free-footed.*” (3. 3. 24-

6) など、クローディアスがハムレットに対して、怒りや憎しみ、畏怖の念を表している台詞などに、特別の強調を演出したい。クローディアスのこういった所を強調することで、より一層このハムレットという作品の血生臭さや悲劇性が強調出来ると思う。

そしてもちろん次に注目するのは主人公のハムレットになる。ビデオの中のハムレット像よりも、私はもっとハムレットを、静かなる怒りと、憎しみと、父の復讐に燃えた人物に演出したい。ビデオの中でハムレットが狂乱を演じているシーンはコミカルな演出が多く見られた。実際の原作の中でもその様なハムレットが描かれている様に思う。しかし私なら、そのシーンをもっとゆっくりした話し方や動作で表したい。そのほうが、暗に復讐を目論んでいるハムレットの雰囲気かでると思う。そして、ハムレットと言えば、やはり名言の数々が特徴的であり、心に残る。“To be, or not to be – that is the question;” (3. 1. 56) や、オフィーリアに対して何度も、“Get thee to a nunnery.” (3. 1. 121) を繰り返したり、“How now! a rat? / Dead, for a ducat, dead!” (3. 4. 24-5) と、ポローニウスを殺めるシーンなどは、あまり英文学に関心がなくとも知っている人も多いのではなかろうか。これらのインパクトの強い名言は是が非でも強調すべきだ、と私は強く思う。それと、ハムレットの“Is this a prologue, or the posy of a ring?” (3. 2. 149) という質問に対し、オフィーリアが“’Tis brief, my lord.” (3. 2. 150) と答え、それにハムレットがまた“As woman’s love.” (3. 2. 151) という格言の様な台詞も、やはりハムレットと言う作品を味わい深いものにしてくれる大切な台詞であると思う。それと、ただ怒りや復讐に燃えるハムレットだけでなく、“He’s lov’d of the distracted multitude,” (4. 3. 4) と、クローディアスに言わせるほど、民衆や家来、誰からも愛され、人気のあることや、“Let me see. Alas, poor / Yorick! I knew him, Horatio: a fellow of infinite jest, of / most excellent

fancy; he hath borne me on his back a / thousand times.” (5. 1. 177-80) と亡き人を思い遣る心優しいハムレットの姿も、主人公として、デンマークのヒーローとして欠かすことのできないポイントであろうと思う。

登場人物や重要な台詞以外で私が大切にしたいところは、3幕4場である。この場以外にも最後の決闘の場なども盛り上がるシーンだとは思えるが、3幕4場での、実の母と子のやりとりに私は重点を置きたい。ハムレットが実の母、ガートルードを愛していたからこそ、その母の、憎きクロードイスとの結婚に対して怒りをぶつけ、ガートルードも、実の子、ハムレットのことを愛しているからこそ、そのハムレットの言葉が胸に深く突き刺さっているのだ。そのハムレットの母への思いは、父、ハムレット王の亡霊の、“Do not forget; this visitation / Is but to whet thy almost blunted purpose. But look, amazement on thy mother sits. / O, step between her and her fighting soul! / Conceit in weakest bodies strongest works. / Speak to her, Hamlet.” (3. 4. 113-8) という台詞から想像することができる。本当に母のことを思っていなければ、こんなに我を忘れて自分の本心をぶつけることは出来ないだろう。このような胸の詰まり、心暖かくなるシーンを強調させてからこそ、他の血生臭いシーンや、狂乱のシーン、オフィーリアの死などの悲しいシーンが生きてくるだろうと思う。

前記を全てまとめると、極端に冷と暖、明と暗などの対比を強調しようとする私自身の考えが見えてくる。私はこの演出が、より心に残るハムレットという作品を作り上げるだろうと思う。